

連載 第7回 『試聴室探訪記』

～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～

マイク・ベレット氏のリスニングルーム拝見

フォトグラファー 谷口 とものり
編集委員 森 芳久



今回は、東京都にお住まいのマイク・ベレット (Mike Verretto) 氏のお宅を訪問いたしました。ベレット氏はハーバード大学在学中および卒業後、「ジャバン・アズ・ナンバー・ワン＝アメリカの教訓」などの著書で有名な社会学者エズラ・ボーゲルス氏の推薦で来日され、現在、在日海外企業はもちろん日本の著名企業のコンサルタントとして活躍されています。氏は音楽愛好家として、また熱心なオーディオファイルとしても知られ、オーディオに関する知識や経験はもちろん、音楽に関しても深い造詣をお持ちです。

氏の自慢のリスニングルームは、20畳のリビング・ダイニングのほぼ半分のスペースをオーディオ専用に使っているにも拘らず、部屋としての居心地が良く、見事にリスニング&リビングルームという難問を両立されています。ダイニング部分は隣接するキッチンにオープンでつながり、リスニングルームのトータル音響容積はとて大きなものとなっています。このことが音に開放感を持たせ、大音量でも伸び伸びとした音を再現する秘密でもあるようです。また機器のセッティングとルームアコースティック調整にはベレット氏の感性で、見事に制御されました。音が出過ぎることがなく、ここには音楽が溢れています。比較的小型のスピーカーながら（ベレット氏は他にも大型のスピーカーや大型アンプなどをお持ちですが、現在は倉庫に保管中です）オーケストラの演奏も朗々と鳴らし、ロンドンシンフォニー、ベルリンフィルなどが全員集合してくれます。また、ナット・キング・コールの美しい歌声が、スピーカー間にポット浮かび上がるその臨場感は、取材を忘れて思わず聴き惚れてしまうほどでした。

もっと聴いていたい誘惑をやっとの思いで振り切り、ベレット氏にこのリスニングルームについて以下いろいろお訊ねいたしました。

ベレット氏にリスニングルームのノウハウをうかがう

森 (以下 M)：ベレットさんがご自分のリスニングルームをセッティングするとき、特にどのようなところを留意されているのでしょうか？

ベレット氏 (以下 V)：オーディオ協会の先輩たちに、自分の蘊蓄を語るのは気が引けますが、取りあえず、独断と偏見に満ちた自分のやり方でよければ簡単に説明いたしますので、適当に聞き流して頂ければと思います。

私は、音を左右する数限りない要素の中で、大きく四つに留意しています。それは、1) 電源回り、2) 部屋のレイアウトと材質、3) スピーカーの位置決め、4) そしてインシュレーターや置台などによる制振です。

どれも重要で、欠かすことができない要素であるのは言うまでもありませんが、案外、これらを忽せにして、新しいコンポーネントへのグレードアップだけで自分の理想の音を追い求めるオーディオファイルが多いのではないのでしょうか。もちろん、新しい機材への憧れや新規購入の時のわくわくした気持ちは非常によく分かりますし、定期的に「アップグレードする」こと自体が一つのオーディオファイルの道だとは思いますが、数十年前と違って、今時、十分な性能を備えたソース機器、アンプ、スピーカーが沢山ありますから、今の所有機材が好みの音質傾向から外れてさえないなければ、頑張っってそのセッティングにもっと注意して、本領を発揮させる努力をすれば大きな効果が得られるはずでせう。どうせ、私には、家計と貴重な音楽鑑賞の時間を勘案すると、常にアップグレードを考えている余裕がなく、そういう意味で純然たるオーディオファイルの道は無理です。因なみに、私が今でもアナログプレーヤーを持っていない理由にも、その音楽鑑賞第一という背景があると思ひます。確かにアナログの音は、旨く再生すれば極めて自然な場合がありますが、ただでさえ普通のシステムでの良い再生は難しいのに、況してやアナログ再生となるとあまりにも多くの要素が音を左右するので、システム調整に時間を費やし過ぎるのが怖くて、敬遠しています（笑い）。

M：それぞれの留意点について、まずは電源回りから具体的に教えていただけますか？

V：はい。私は、オーディオ専用の電源ラインを一本、分電盤から引いています。完全なノイズ分離という意味では、オーディオ専用のサブ分電盤を設置しておけば尚良いでしょうが、私の住居は賃貸で、また、場所と工事費の制約があつて、そこまでできません。複数の電源ライン、あるいは少なくともデジタル機器専用のもう一本の追加ラインを引くのが良いという人もいますが、グラウンドループの発生を防ぐためには一本だけの電源ラインに全部のコンポーネントをつなぐのがむしろ良い、と私はある先生から教わりました。もちろん、要求電流が大きい巨大なアンプを使う場合には別のラインは要るでしょうが、私は今のところ一本で間に合っています。

ちなみに、私には予算面ではとても無理ですが、この間友人宅で小柳出電気さんの最高級屋内配線用ケーブル EE/F-S 2.6 の引き回しに立ち会いました。その効果は思った以上に絶大で、まるで友人のシステムが忽ち数段上の機材に変身したような音の改善でした。まあ、このケーブル

を将来の夢として取って置きましょう。

理論的には、「クリーン電源」と呼ばれる完全な正弦波を成形する電源装置から電源を供給するのが良いかもしれませんが、私の経験では簡単な電源タップを使った方がより自然で開放的な音になります。要するに、電源はできるだけ「シンプル・イズ・ベスト」と考えています。

また、オーディオ機器はできるだけ高い電圧で使う方が音が良い、とあるアンプの設計者が教えてくれました。つまり、機器の入力仕様が許せば、100Vより120V、120Vより240Vが良いということです。私の機器を元々アメリカで購入して使っていたので、日本に持って来るときには敢えて日本の電源仕様に変更しないで、分電盤から200Vの専用電源ラインを引いて、バランス型のノイズ除去ダウントランスによって電圧を機材の120Vに落としています。もちろん、トランスをかますと音が少し損なわれると言う人もいますが、ノイズ除去と高い電圧のメリットとのトレードオフです。オーディオには「完全」というものはなく、設計も再生もすべてトレードオフの世界です。

M：それでは、次に部屋とレイアウトについてご説明いただけますか？

V：「LEDE」（ライブエンド・デッドエンド）という理論は広く知られていると思いますが、私は基本的には録音スタジオで適用されている方式、つまり、スピーカーの背後や周りにはカーテンなどの吸音材を配置し（デッド）、リスナーの周りや後ろの壁には何も張らない（ライブ）という方式とは逆のやり方をしています。部屋のスピーカー側はライブ、リスナー側はデッド、というやり方です。数年前の在米時に私はESPというスピーカーの販売代理店をやったことがあり、その設計者が教えてくれた方式です。

理由を言いますと、各々のスピーカーには、周波数特性、音質傾向がありますが、試聴室のスピーカー側、つまりスピーカーの背後や周りに吸音材を置き過ぎる場合、設計されたスピーカーの周波数特性、特に高域特性を弄ることになります。たとえ高音が若干鋭すぎるのが気になるスピーカーであっても、高音を吸収することによってスピーカーの設計とは違った周波数バランスになり、聴感上不自然な感じになります。もちろん、スピーカーの周りに何も置かない裸な壁がベストという訳でもなく、況してガラスやCDが載ったラックのような固い物がスピーカーの周りがあると中高音の反射が強調され過ぎてさらに不自然になります。天然木のような反射材、拡散効果のある物、およびほどほどの吸音材をバランスよく置くのが良いと思います。最近、気になる製品として、サーロジックの反射・拡散用音響パネルがありますが、いずれ、私のリスニング環境と経済が許せば使いたいと思っています(<http://www.salogic.com/frame/frame-sum00.htm>)。このサイトに掲載されている顧客のルームチューニング例の写真が非常に興味深く、涎が出るばかりです。

部屋についても一つ留意するのは左右対称性です。もちろん、自分の設計・建築した専用空間でない限り、完全な左右対称性は無理でしょうが、両方のスピーカーの周り、両方の耳の周りをなるべく同じような音響条件にしようとしています。私の部屋の場合、スピーカーの横の壁の片方はガラス扉、もう片方は音を狂わせる出窓ですが、防音カーテンや拡散パネルで曲がりなりにも対処しています。

M：確かに、左右のバランスがとても自然ですね。

V：ありがとうございます。三つ目の留意点は、おそらく一番大事ですが、スピーカーの配置です。スピーカーの種類やメーカーによって置き方が全然違うので一概には言えませんが、私はまず、音場再生の奥行感が好きなので、スピーカーと後ろの壁との距離をなるべく開けるようにしています。オーディオ空間は、家族の生活空間と両立しなければならないので、スピーカーの背面を壁から約90cm開けるのが関の山ですが、それで十分な音場を得ていると思います。もちろん、スピーカーの配置においても左右対称の原則を守ろうとしています。

M：これもまた、ベレットさんのおっしゃる通りとても奥行き感が良くできています。

V：経験上、スピーカーの非常に細かい位置調整で、例えば5mm動かすだけでも音が変わり、その現象は性能の良いスピーカー程はっきり現れます。

スピーカーの配置に関する理論、例えばカーダス方式、オーディオフィジック方式、ウィルソンオーディオ方式など色々ありますが、それぞれの詳細はさておき、私の経験では、スピーカー間の距離が非常に重要です。音の広がり求めてスピーカー間の距離を広げ過ぎる人が多いようですが、私はむしろその距離を少し狭めることで中央の音像を明確にし、全体に立体感と重厚感を増しています。現在、私の2台のスピーカーは、バッフル中央から測って約2メートル離れています。部屋は細長く、20畳なのに12畳間の標準幅の3.5メートルだけです。あと50-60cmの幅があれば、倉庫にある大好きなESPの大型スピーカーを使いたいのですが。

最後に、インシュレーターや置台についてですが、これは気が狂う領域です。(笑い) これに関するオーディオ理論を読むと、相反するやり方が2つあるようです。一つはアイソレーション、つまり、コンポーネントを宙に浮いたような状態にして、機械的振動から隔絶させること、もう一つはカップリング、つまり、盤石の機械的「アース」に「接地」することです。ターンテーブルの開発の推移を見れば分かるように、しばらく前までは重いコンクリートの基礎の上にまたターンテーブル用の重い台を置くのが世の趨勢でしたが、最近ではむしろ、多数のベアリングなどを利用した複雑な構造でアイソレーションを図る設計が主流です。

いずれにしても、性能の良いシステムであれば、コンポーネントの脚やインシュレーターによって音は大きく変わり、気を付けないとエンドレスな微調整の泥沼に陥りやすいです。しかし、コンポーネントの下に何を敷いても音が変わるとはいえ、その変化が良いかどうかは判断しにくく、最終的には個人の感性でしょう。

私の経験で言いますと、アイソレーションでは音の純度は高まり、蒸留水のような透明度の高い音にはなりますが、厚み、温もり、立体感に欠けがちです。かと言って、完全な機械的アースはあり得ないので、カップリングだけでは音を濁す振動がどうしてもある程度伝わってきます。私のCDプレーヤー、プリアンプ、アンプの下に使っているのは、ESPの設計者が元々スピーカーの脚として開発した、アイソレーションとカップリングを両方手掛けたハイブリッドのコーンで、自分の好みの立体感、重厚感、および温もりを得ていると同時に、機材を悪質な振動から十分に防護しています。コンセプトとしてはおそらくJ-1プロジェクトのICPコンポジットのよう

なものです、音の傾向は少し違います。

インシュレーターは何百という種類があり、まったく癖のない完全なものはないからこそ、選択は最終的にはリスナーの感性に委ねられます。しかし、気を狂わせずにインシュレーターの効果を比較的早く判断するのに良いCDを一枚見付けています。それは、TACETのCD34、「What About This, Mr. Clementi?」。このCDでは、同じ曲が同一のスタジオで複数のピアノ(Bechstein、Bösendorfer、Fazioli、Steinway、Yamaha)で弾かれており、それぞれのピアノの違いがどれだけ出るかによって、システムの性能や癖が分かります。特に、ピアノの高域の倍音成分が楽器の特徴を表しますが、その違いを濁さず、しかも特にBösendorferのようなピアノの中低域の重厚感を損なわないESPのインシュレーターに決めました。

M：ベレットさんがオーディオファイルになるに至った背景その他、自分のオーディオ生活における持論などお持ちでしたら、少しお話して頂けますか？

V：私は昔から音楽、特にクラシック音楽をよく聴いていて、コンサートにもよく行きます。大学時代には、ヨーヨーマが先輩として在籍していて、彼の生演奏を、今の数万円ではなく、キャンパス内で数百円で聴けましたし、大学のグリークラブで小澤征爾指揮のボストン交響楽団と一緒に演奏したこともあります。あたりまえのことかもしれませんが、オーディオより音楽を先に愛していました。そして、私にとってのオーディオとは、あくまで愛している音楽を再生するための手段であり、周波数特性などの「オーディオ」そのものの追及にはあまり興味はありませんでした。

最初はケーブルのつなぎ方すら分かりませんでした(笑)。しかし、伝説的なオーディオ店H.A.HiFiの青木さんという方に出会ったら、オーディオの可能性を知り、衝撃を受け、さすがに音楽をリアルに再生するためには音質を追求しなければならないと認識しました。そして、音質の良い再生に拘りだすと、今度は一つの大きな分かれ道にぶち当たり、オーディオファイルや設計者の意見が分かれるところです。

つまり、オーディオ再生は、あくまで録音ソースに忠実であるべきか、それとも生演奏に近い体験をさせてくれるべきか、という永遠な課題です。意外とその二つには相容れないものがあるから、面白い議論になります。多くのオーディオファイルは、「もちろん、録音ソースの中身を有りの儘に再現できなければ、オーディオ機器としては失格だ」と言うかもしれません。それに対して、一部の設計者および音楽愛好家は、録音ソースよりも、自分が今まで体験してきた生演奏に近い音を再現しようとし、彼らにとって、しょせん録音ソースだって、何も絶対的なものではなく、信号はマイクやケーブルや種々の電子機器を通じてテープに到達するわけですから、それを「忠実」に再生することは、たとえ技術課題として面白くても、音楽にはあまり関係がありません。また、録音時のマイクの配置だって聴衆の席とは全く違いますから、録音は人工的なものです。実際のところ、生演奏では、特にホール中央より後ろに座っている聴衆の耳に高音が到達するまでには、ある程度壁などに吸収されて鈍くなって聴こえますし、低音もどすどすんと鳴るよりも、方向性のない柔らかい音になりがちです。ですから、「ソースへの忠実度よりも音楽性」を求める設計者は、自分の感性で、ある程度、音を「作る」方針を取らざるを得ません。

高域と低域をほんの少し和らげ、中域を強調するのが一つのやり方です。極端に言えば、昔ながらのイギリスの老舗メーカーに代表される音か、今流行りの「花火大会」のような再生を追求する多くのアメリカやドイツのメーカーに代表される音か、傾向が大きく分かります。

M：「花火大会」とはとても面白い譬えですね。確かにそのような傾向を持った機器が見受けられますね。根底には「音楽かオーディオか」という議論があるのでしょうか？

Y：アンプは電気信号を忠実に伝送・増幅しなければ仕方がないのですが、特にスピーカーに関しては、新素材の使用や超現実的な透明度や凄い高低音の伸びやスピード感重視といった現代の傾向よりも、生演奏で体験するような音に主眼をおいた独自の音作りを選択しても良いと思います。反対に、「音楽は音楽、オーディオはオーディオ」と割り切る人もいますが、だったら私はオーディオではなく音楽を選びます。

数年前、ちょっとだけアメリカでオーディオ業界に身を置いたこともありましたが、設計者やオーディオファイルの中には音楽性重視派が少なく、技術趣向派が圧倒的に多いように感じました。辛辣な意見かもしれませんが、スピーカーの設計において、高音を少し強調すれば透明度は上がりますし、聴感上、スピード感も増します。しかも、そういった「近代的な音」は素人に受けやすいから、商売上も選択されやすい方針です。ですが、それは設計者のほとんど誰にでもできる「技術」であって、音楽的感性や芸術を必要としません。私は、音楽には、技術では説明できない素晴らしい感性の要素がありますから、音楽性重視派に親しみを感ずります。おそらく、「職人文化」を誇る日本の家内工業的なオーディオメーカーには、音楽性重視派が多いのではないのでしょうか。

生演奏の音は、多くのオーディオ再生とは全然違って柔らかく暖かいものです。それをよく体験して、それとオーディオシステムをよく比較して聴けば、音楽性の高い物と、仕様が優れていても音楽性に欠ける物との違いがすぐ分かるはずで、特にスピーカーでは顕著です。

まあ、この話になると火花が散る長い議論になりますから、別の時にお預けにしましょう。

M：そうですね。この話は是非また改めまして本誌上にご寄稿頂きたいと思います。その折にはどうぞよろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

(文責 編集部)

使用機材とアクセサリについて (マイク・ベレット氏の解説)

スピーカー：米国の Rosinante 社 (廃業) の Dulcinea。

2 ウェー、バスレフ型、主な特徴は、Dark Matter といった制振性の優れた独自の素材をバッフル面に使っているから、濁りの少ない音です。

プリアンプ (ラックの最下段) とパワーアンプ (ラック両脇の床)

日本の Concert Fidelity 社の CF-080 LS ラインステージ・プリアンプと 6B4G パワーアンプ。

主に海外で商売しているため日本ではあまり知られていないが、長野県にある日本のメーカー。最近では球のアンプを止めて石のアンプを作っていますが、真空管のプリアンプはまだ製造されており、有名なマスターリング・エンジニア Steve Hoffman 氏が最も評価しているプリアンプです。回路はおそらく世界一に簡潔で、極めて高純度の音を誇ります。ソリッドステートのパワーアンプも素晴らしいです。(<http://www.concertfidelity.jp/>)

CD プレーヤー：(ラックの下から三段目)

APL Hi-Fi 社がモディファイした Denon の DVD プレーヤー。(トランスポート以外は全部改良して、出力段には 6H30Pi の真空管を使用。尚、APL Hi-Fi の最上位機種は、とても私の手の届かない価格ですが、エソテリックの単体プレーヤーをモディファイした物で、間違いなく世界一のデジタルプレーヤーの地位を争う物です。)(<http://www.aplhifi.com/>)

バランス型のノイズ除去ダウントランス (200V→120V)：(ラックの下から二段目)

Concert Fidelity 社が受注生産してくれた物。

オーディオラック：タオック社の CS-5D。

見た目と頑丈さで選びました。(http://www.taoc.gr.jp/products_rack.html)

スピーカースタンド：MA by So Shi Te 社 (東京、青山の会社) による竹集成材の特注品

竹集成材はスピーカースタンドには非常に良いらしく、音の癖を感じさせません。

(<http://www.mabysoshite.com/>)

スタンドボード：前田製管工業の MMW-2。

非常に重く頑丈で、制振性に優れています。この材質のオーディオ用途を元々考えたのはダイナミックオーディオの川又さんだったようで、ダイナさんでしか買えないと聞いています。

(http://www.maeta.co.jp/_Maetaseikan/Products/pro_10/Audio_Board.htm)

拡散スタンド：Rosinante 社 (廃業) 「Room Lens」と呼ばれる物。

単純そうな物ですが、音響的に難しい部屋でも意外と効果を発揮します。拡散およびヘルムホルツ共鳴の理論に基づいているそうです。

スピーカーの斜め横、ラックの背後、視聴ポジションの横のパネル：サウンド・ハンターの桜材音響パネル。

長年愛用していますが、最近のサウンド・ハンターのサイトを見たら、「コントロールパネル」と呼ばれる追加パネルを開発して、それをこの桜材音響パネルの吸音部分に装着するともっと「ライブ」なサウンドが得られるということです。つまり、上で提唱している「スピーカー側はライブ」という方式に近いようです。

(<http://www.soundhunter.co.jp/audio/accessories/sap/sap.html>)

スピーカーケーブルとインタコネクトケーブル：Concert Fidelity 社の手作りの物です。余計に複雑な構造を持たず、ストレートな音を伝送します。何人かの知り合いが数倍高いケーブルをこれに取り換えました。たぶん特注になります。

パワーケーブル：米国の Audience 社製の物。

価格が手頃で、しかも音に癖がなく、重すぎる音でも軽すぎる音でもないと思います。

(<http://www.audience-av.com/>)

CD ラックに被せている簾：和風インテリア藍やのロールアップ簾。

価格も手頃だし、材質として良い天然木のオイルステーン仕上げの物があつたので、CD ラックからの乱反射を防ぐのに良いアクセサリーだと思いました。(<http://www.ai-ya.jp/>)

パノラマ画面の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、はじめのページの[試聴室画像](#)をクリックしてご覧ください。
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
 - + 画面のズームイン
 - 画面のズームアウト
 - ← 画面の左移動
 - 画面の右移動
 - ↑ 画面の上方向への移動
 - ↓ 画面の下方向への移動